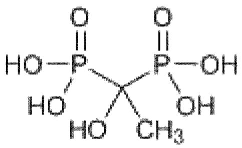
確認試験　⑴　本品10mlにヨウ化カリウム0.15ｇを加えるとき、液は、黄～褐色を呈する。
⑵　本品１mlを水89mlに加え、検液とする。ＤＰＤ・ＥＤＴＡ試液0.5mlにリン酸緩衝液（エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム含有）0.5mlを加え、更に検液10mlを加えるとき、液は、淡赤色を呈する。
⑶　本品10mlに水酸化ナトリウム溶液（１→２）１滴を加えた液は、波長324～330nmに極大吸収部がある。
純度試験　液性　pH4.0～7.5
定 量 法　本品約20ｇを精密に量り、水50mlを加え、ヨウ化カリウム１g及び酢酸（１→４）５mlを加え、直ちに密栓して暗所に15分間放置し、遊離したヨウ素を0.01mol／Ｌチオ硫酸ナトリウム溶液で滴定する（指示薬　デンプン試液３ml）。ただし、デンプン試液は、終点近くで液の色が薄い黄色になったときに加える。終点は、液の青色が消えたときとする。別に空試験を行い補正する。

0.01mol／Ｌチオ硫酸ナトリウム溶液１ml＝0.7990mg　Br

第２のＤのビートレッドの目の次に次の一目を加える。

１―ヒドロキシエチリデン―１，１―ジホスホン酸
１―Hydroxyethylidene―１，１―diphosphonic Acid
ＨＥＤＰ
エチドロン酸



$C_2H_8O_7P_2$　　分子量　206.03
（１―Hydroxyethane―１，１―diyl）diphosphonic acid　［2809―21―４］
含　　量　本品は、１―ヒドロキシエチリデン―１，１―ジホスホン酸（$C_2H_8O_7P_2$）58.0～62.0％を含む。
性　　状　本品は、無～淡黄色の澄明な液体である。
純度試験　⑴　比重　1.430～1.471
⑵　液性　pH2.0以下（1.0ｇ、水100ml）
⑶　塩化物　Clとして0.004％以下
本品約25ｇを精密に量り、水50ml及び硝酸３mlを加え、0.005mol／Ｌ硝酸銀溶液で滴定を行う。終点の確認は、電位差計を用い、指示電極は銀電極を、参照電極は銀―塩化銀電極を用いる。終点における0.005mol／Ｌ硝酸銀溶液の消費量ａmlを求め、次式により塩化物の量を求める。ただし、変曲点が２つ以上ある場合は、終点は、最終の変曲点とする。

$$\text{塩化物（Cl）の量（\%）}=\frac{a\times 0.005\times 3.545}{\text{試料の採取量（g）}}$$

⑷　亜リン酸　H_3PO_3として4.0％以下
本品約1.5ｇを精密に量り、ヨウ素フラスコに入れ、水20ml及びリン酸緩衝液（pH7.3）50mlを加え、水酸化ナトリウム溶液（１→２）でpH7.3に調整する。次に0.05mol／Ｌヨウ素溶液25mlを正確に量って加え、直ちに密栓して暗所に15分間放置した後、酢酸５mlを加え、過量のヨウ素を0.1mol／Ｌチオ硫酸ナトリウム溶液で滴定する（指示薬　デンプン試液１～３ml）。ただし、滴定の終点は液が終点近くで淡黄色になったとき、デンプン試液を加え、生じた青色が脱色されるときとする。別に空試験を行い補正する。

0.05mol／Ｌヨウ素溶液１ml＝4.10mg　H_3PO_3

⑸　鉛　Pbとして5.0μg／ｇ以下
本品0.80ｇを量り、白金製、石英製若しくは磁製のるつぼ又は石英製のビーカーに入れる。硫酸１mlを加え、徐々に温度を上げ、試料が炭化し、硫酸の白煙が発生しなくなるまで加熱する。必要があれば硫酸を更に加え、試料がほとんど炭化するまで加熱する。必要があれば、容器に緩く蓋をして電気炉に入れ、徐々に温度を上げて450～600℃で強熱して灰化する。炭化物が残る場合は、必要があればガラス棒で炭化物を砕き、硫酸（１→４）１ml及び硝酸１mlで潤し、白煙が発生しなくなるまで加熱した後、電気炉で強熱して完全に灰化する。残留物に塩酸（１→４）10mlを入れ、水浴上で加熱して蒸発乾固する。残留物に塩酸（１→４）20mlを入れ、時計皿等で覆い、５分間沸騰させ、冷後、試料液とする。試料液にクエン酸水素二アンモニウム溶液（１→２）10mlを加え、チモールブルー試液１mlを指示薬として、アンモニア水を液の色が黄色から淡黄緑色に変わるまで加える。この液を分液漏斗又は遠心管に移し、灰化容器を少量の水又は温水で洗い、洗液を分液漏斗又は遠心管に合わせる。これにピロリジンジチオカルバミン酸アンモニウム溶液（３→100）５mlを加えて５分間放置し、酢酸ブチル10mlを正確に加えて５分間振とうした後、放置又は遠心分離する。その後、酢酸ブチル層をとり、これを検液とする。別に鉛標準原液１mlを正確に量り、水を加えて正確に100mlとする。この液４mlを正確に量り、試料液の場合と同様に操作し、比較液とする。検液及び比較液につき、鉛試験法第１法により試験を行う。
⑹　鉄　Feとして10μg／ｇ以下
本品約0.2ｇを精密に量り、容器に入れ、硝酸５mlを加えて、マイクロ波を照射して試料を分解する装置で230℃に昇温して灰化する。冷後、メスフラスコに移し、水を加えて正確に50mlとし、試料液とする。別に鉄標準液適量を正確に量り、硝酸（１→10）を加えて１ml中に鉄（Fe＝55.85）10ng、25ng、50ng、100ng及び200ngを含む５濃度の液を調製し、標準原液とする。試料液及び５濃度の標準原液をそれぞれ10mlずつ正確に量り、内標準溶液40μlずつを正確に加え、検液及び標準液とする。ただし、内標準溶液は、イットリウム標準原液1.0mlを量り、硝酸（１→10）を加えて100mlとする。検液及び標準液につき、誘導結合プラズマ発光強度測定法の内標準法により検量線を作成する。検量線から検液中の鉄の濃度（ng／ml）を求め、次式により鉄の量を求める。

$$\text{鉄（Fe）の量（μg／g）}=\frac{\text{検液中の鉄の濃度（ng／ml）}}{\text{試料の採取量（g）}\times 20}$$

⑺　ヒ素　As_2O_3として6.7μg／ｇ以下（0.30ｇ、第１法、装置Ｂ）
定 量 法　本品約３ｇを精密に量り、水150mlを加えて溶かし、かくはんしながら１mol／Ｌ水酸化ナトリウム溶液で電位差計を用いて滴定する。終点は、第二変曲点とする。終点における１mol／Ｌ水酸化ナトリウム溶液の消費量をａmlとする。

１―ヒドロキシエチリデン―１，１―ジホスホン酸（$C_2H_8O_7P_2$）の含量（％）

$$=\frac{a\times 206.0}{\text{試料の採取量（g）}\times 30}-\text{亜リン酸の量（\%）}\times 1.675$$

第２のＥの亜塩素酸水の目の次に次の二目を加える。

過酢酸

過酢酸を製造する場合は、それぞれの成分規格に適合する酢酸及び過酸化水素を原料としたものでなければならない。

過酢酸製剤

過酢酸製剤を製造する場合は、過酢酸又はそれぞれの成分規格に適合する酢酸、過酸化水素、１―ヒドロキシエチリデン―１，１―ジホスホン酸若しくはオクタン酸を原料とし、過酢酸若しくは酢酸及び過酸化水素に１―ヒドロキシエチリデン―１，１―ジホスホン酸を混合したもの又はこれにオクタン酸を混合したものでなければならない。

第２のＦの亜塩素酸ナトリウムの目中「さくらんぼ」の下に「，食肉，食肉製品」を、「0.50ｇ以下」の下に「，食肉及び食肉製品にあっては浸漬液又は噴霧液１kgにつき0.50～1.20ｇ」を加え、同目に次のように加える。

亜塩素酸ナトリウムは、食肉及び食肉製品に使用するとき、pH2.3～2.9の浸漬液又は噴霧液を30秒以内で使用しなければならない。